

## 〈実践報告〉 大学入試小説指導の詩学

——中島敦「山月記」を例に——

高 山 卓

はじめに

近年、国語科教育の領野において報告される授業実践の深化は著しい。その大きな要因には、やはり、新高等学校学習指導要領（二〇一八年三月告示、二〇二二年度より実施）をめぐる問題や、いわゆるコロナ禍の影響を挙げられよう。創意工夫を凝らした授業実践が、数多く報告されている。

高等学校における小説の指導については、学習者の多様な解釈を活かした実践報告が散見する。それらは、国語科教育の新たな地平を切り拓く実践報告であり、意義深いものばかりである。

しかしながら、その活況においてこそ、山田哲久氏が「棒」（安部公房）の実践報告<sup>①</sup>のなかで述べた次のようなことは、改めて意識されてよい。

明らかなのは、文学教材の〈自由な〉解釈には、読解リテラシーが前提されているということである。「自由に読んでみなさい」と言うと、論理的な根拠を持たない好き勝手な解釈をする生徒も、道徳的な解釈に収斂させたがる生徒もいる。もちろん、それぞれの文学作品に絶対的な一つの解釈があるわけではない。多様な解釈は文学の楽しみでもある。しかし、多様な解釈を支えているのは、読解リテラシーであることを忘れてはならない。

山田氏が「読解リテラシー」と呼ぶのは、「文学を感覚的ではなく、本文を根拠に、論理的に解釈する」能力のことである。以上の立場において、山田氏は、学習者が最終的に「〈自由な〉解釈」ができるようになるための一つの段階として、

なぜそう解釈することができるのかという過程を、順を追って

説明する。そして、その過程を理解できているかを問う。「棒」という作品を理解させるといっても、私の「山田氏の…稿者注」解釈を論理的に理解できているかを問う。

という形で「棒」の授業実践を報告している。

本報告も、山田氏と同じく、「文学教材の〈自由な〉解釈には、読解リテラシーが前提されている」とする立場をとる。現在、学習者の多様な解釈を活かした授業実践の報告が散見する状況にあればこそ、それらに追隨する授業実践を試みる場合は、学習者の「論理的な根拠を持たない好き勝手な解釈」や「道徳的な解釈」のケアも念頭に置く必要があることを、授業者の側が意識しておくべきだろう。学習者が正しい意味で「〈自由な〉解釈」をできるようにするために、なによりもまず「読解リテラシー」が身に付けられねばならないことを、授業者の側が意識しておくべきだろう。

その上で、ここで先に結論を言えば、本報告では、学習者の「読解リテラシー」を育み、小説の多様な解釈を楽しむようにするために、大学入試小説（大学入試における国語の小説問題）の解法を活用しうることを主張する。

一般的に見て、唯一の絶対解を求めなければならない大学入試小説と、小説を多様に解釈することは、相容れないものに映ろう。しかし、小説を多様に解釈することが、「読解リテラシー」を基礎と

すると考えるならば、その限りではないのではないか。大学入試小説の設問は、無論、作問者の読解に基づいて設定される。したがって、これらの設問の解答を求めることは、作問者の読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解することに他ならない。授業者の側が、この関係を明確に対象化して指導にあたるとすれば、大学入試小説の解法を活かし、「読解リテラシー」を育み、ひいては小説を多様に解釈することへとつなげるのである。

大学入試小説の解法の活用には、学習者の進路保障の観点から、小説の多様な解釈を楽しむことを一切捨象し、大学入試小説で高得点をとるための解法を指導することに特化せざるを得ないという学校が、少なくあるまいと考えるからである。だが、右に述べたような水準において、大学入試小説と小説を多様に解釈することを、学習者のなかで同一直線上のものとして布置できれば、そのような悩みは多少なりとも軽減されよう。「読解リテラシー」を媒介項とすれば、断絶がイメージされがちな大学入試小説と小説を多様に解釈することの間を、架け橋できるのではなからうか。

この意味で、本報告は、大学入試小説指導の詩学の構築を目指したものである。すなわち、大学入試小説の解法を活かし小説の多様な解釈へとつなげるという仕方でも「文学」を立ち上げる、その理路の一つを解き明かすことを目指したものである。

さて、本報告の授業実践の概要は、次の通りである。

対象…龍谷大学付属平安高等学校・中学校（稿者の勤務校）

特進コース（国立公立大学・難関私立大学を目指すコース）

二〇二二年度高校二年生二クラス四八名

高校一年生二クラス五四名

科目…現代文B（高校二年生）、言語文化（高校一年生）

教材…「山月記」（中島敦）

時数…五〇分×六コマ（標準）

なお、実際には、各クラスの実態に照らして、ノートかワークシートか、個人作業かグループワークかなど、授業形式を適宜使い分けたが、以下、その別についての言及は割愛する。いずれの授業形式においても授業内容（設定した設問（後述））は同様としたのであり、本報告では授業内容の紹介に主眼を置くためである。

一、教材としての「山月記」の定評と、学習者の初読の感想

まず、教材としての「山月記」の定評を確認しておこう。安松拓真氏に、的確な把握がある<sup>②</sup>。

研究において、まず「山月記」に求められたのは、文学研究の立場からも教室においても最重要視される、「主題」であった。

文学研究者の読解や批評、現場での実践報告などからやがて導き出されたのは、李徴が虎になった原因として自ら口にする、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」や、袁愴が李徴の詩から看取する「何処か（非常に微妙な点に於いて）欠ける所」であった。制御しきれぬ自己、人間性の欠如がもたらした悲劇、という読み方は教育現場の方からも積極的に提言され、やがてそれは作者・中島敦の自我の問題へと結び付けられていくことになる。／また、「山月記」の草稿と、原典となった唐の李景亮による「人虎伝」との比較が詳細に検討されていくにしたがつて、中島敦の「意図」を明らかにする試みは、極めて実践的に行われていった。やがてその成果は、李徴を中島敦の分身とする読み方へと発展していき、近代的自我意識の分裂に苦しむ姿や、家族を抱えながら作家生活に専念できない葛藤と重ね合わせて論じられるようになっていく。ここまで述べてきたような、教育現場で今もなお根強く支持される読み方は、一九七〇年代頃から大きくその形を変えてはいない。

〔引用文中の「／」は、改行を示す。以下同様〕  
安松氏によれば、教材としての「山月記」は、「近代的自我意識の分裂に苦しむ姿」や「葛藤」を読み取るものだとという見方が「一九七〇年代頃から大きくその形を変え」ず「教育現場で今もなお根

強く支持され」、定評とされている。

このような、教材としての「山月記」への定評的な読みは、本報告の授業実践における学習者の初読の感想にも見られた。<sup>③</sup>

A 自分の過ちを悔いるが、まだ詩をつくりたいという気持ちと葛藤している。

B 袁俊に詩を残してほしいと願っている所で、まだ自尊心が残っていて、本当に反省しているのかわからなかった。

C 李徴の根本的な部分が直っていないので、そのままこれから先も生きるのかなと思った。

これらは、李徴の「葛藤」を読み取ったものである。さらに、Cについては、その「葛藤」が人間だったとき以来抱え続けてきたものであるから、以降も人間的な「葛藤」を抱え続けていくことが予見されると、李徴の一貫した「葛藤」を鋭く指摘している。

一方で、次のような初読の感想も見られたことが、注目された。

D 李徴が、最後には虎として生きていくしかないと思わざるをえなかったのが、悲しいことだなと思った。

E これからは虎として生きていこうと考え、数少ない友人であつた袁俊にも別れを告げた。

F 李徴が最後に姿を見せたのは、袁俊に向けてだけではなく、李徴自身への決意とも考えられました。

〈実践報告〉 大学入試小説指導の詩学

これらは、傍線を付した通り、李徴が「葛藤」を超克し、「虎として生きていく」「決意」を固めたことと読み取ったものである。この読みよれば、定評的な読みをした場合とは、ほとんど正反対の解釈が小説に与えられることになる。また、これらは、傍点を付した通り、途中までは「葛藤」していた李徴が「最後には」「決意」を固めたと指摘しているのであり、一概に李徴の「葛藤」を読み取れていないわけでもなく、興味深い。

以上を踏まえ、本報告の授業実践では、次のⅠ・Ⅱ・Ⅲの方針を立てた。

Ⅰ 定評的な読みの読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解させる。

Ⅱ D・E・Fの感想のような読みを、李徴の「葛藤」を読み取れていないものとして切り捨てるのではなく、どう読めば李徴の「決意」を前景化した読みをしようか、その読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解させる。

Ⅲ 大学入試小説の解法を指導するなかで、Ⅰ・Ⅱいずれにも取り組み、小説の多様な解釈の可能性を触知させる。

二、大学入試小説の解法のエッセンスと、設定した設問  
次いで、大学入試小説の解法についても確認しておこう。中野芳樹氏の『現代文 読解の基礎講義』<sup>④</sup>に要領よくまとめられており、本報告の授業実践では、これを参照枠とした。

中野氏は、大学入試小説に取り組み際の、解答の導出の前提となる「読解作業」として、「十分程度で一回だけ通読し、ストーリー展開を把握する。最初は主人公を確認すること」、「その際、回想シーンの挿入など時系列（時の流れ）に非連続な変化がないか注意すること」、「登場人物の心情表現を発見したら、しつかりマーキングしておく（心情表現を囲むとよい）」こと、「その際、主人公とそれ以外とで、マークの仕方を変えておく」こと、「登場人物の性格設定（年齢・性別・職業・健康状態・能力・性格等）が確認できれば、マーキングしておく」こと、「シチュエーション設定（時代背景・場所・家庭環境・人間関係等）が確認できれば、マーキングしておく」ことの六点を挙げる（一六五頁）。

そして、  
さまざまな見かけ・形式の違いにもかかわらず、小説問題では多くの設問が本質的には心情説明型設問である。ほぼ五割から七割を占める。（一四六頁）

ことから、習得が最優先される解法として、問われているのが「誰の、いつの心情かをはっきりさせる」、「核となる心情表現を特定する」、「なぜそのような心情に至ったのか」「何に対してそのような心情を抱くのか」を読み取る、問われていることに對して過不足のないよう「表現の微妙なニュアンスの正確な反映を解答表現に求める」という手順を指南している（一五〇・一五一頁）。

概して、大学入試小説においては、【誰】【どのような心情】【心情の理由】【心情の対象】の四要素を、【細かなニュアンス】に留意しつつ整理することが、高得点をとるための必勝法となる解法だと  
言える。

本報告の授業実践では、学習者がこのような大学入試小説の解法を習得することに資すのを目的として、また、第一章で掲げた方針を踏まえて、「山月記」に次の設問を設定した。

問一 まだ人間だったときの李徴の人物像を答えよ。

問二 虎になった李徴が、袁徴と再会した際、どのような行動をとったか答えよ。

問三 なぜ、李徴ははじめ袁徴の前に「姿を現」さなかったのか、説明せよ。

問四 はじめ袁徴の前に「姿を現」さなかった李徴だが、結末ではどのような行動をとったか答えよ。

問五 なぜ、李徴は結末においては袁傖の前に「姿を現」したのか、説明せよ。

問一四 「悲泣の声」とあるが、このときの李徴の心情を説明せよ。

問六 はじめ、李徴は、虎になってしまった理由をどのように語ったか、答えよ。

三、「決意」した李徴

問七 その後、李徴は、虎になってしまった理由をどのように語ったか、答えよ。

問八 「しばらく返事がなかった」とあるが、このときの李徴の心情を説明せよ。

問九 「今から一年ほど前」～「声は続けて言う」から、李徴の「葛藤」を答えよ。

それでは、第二章で示した設問の模範解答に沿って、実際の授業実践について述べていく。授業は、設問一問ごとに、学習者が解答作業をし、頃合いを見て授業者が解説する、これを繰り返す形で展開した。第一章で掲げた方針との関係では、方針Ⅱにかかわる設問への取り組みから始めることとした。それが問一～七である。

問一〇 李徴が「人間の心がすっかり消えてしまえば」「しあわせになれる」と言うのはなぜか、また、「人間の心がすっかり消えてしま」うことを「恐ろしく感じている」と言うのはなぜか、それぞれ説明せよ。

「問一 まだ人間だったときの李徴の人物像を答えよ」は、もちろん解答が一つに定まるような問題ではなく、それでよい。学習者は、小説冒頭の本文「博学才穎」「性、狷介」「自ら恃むところすこぶる厚く」「賤吏に甘んずるを潔しとしなかった」「人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた」「妻子の衣食のために節を屈して」「狂悖の性」等に即して、「頭が良い」「頑固で意志を曲げない」「自尊心が高い」「正義感が強い」「後先を考えない」「妻子

問一一 「なぜこんな運命になったか分からぬ」～「晝角が哀しげに響き始めた」から、李徴の「葛藤」を答えよ。

問一二 「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」とはどのようなものか、それぞれ説明せよ。

思いではある」「自己中心的」など、様々な解答を挙げた。いずれも本文に即した正しい解答であることを伝えつつ、以降の授業の展開に鑑み、「自尊心が高い」という解答を、特に重要なものとして説明した。

問一三 「慟哭の声」とあるが、このときの李徴の心情を説明せよ。

説明した。

「問二 虎になった李徴が、袁修と再会した際、どのような行動をとったか答えよ」は、問三へのつなぎとなる小問である。「叢から姿を現さなかった」が解答となる。

「問三 なぜ、李徴ははじめ袁修の前に「姿を現」さなかったのか、説明せよ」では、【誰】【どのような心情】【心情の理由】【心情の対象】を整理した上での解答を求めた。設問と次の本文から、

自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まっているからだ。

【誰】「李徴」、【どのような心情】「卑しい姿だと自覚している」および「袁修に怖がり嫌がられてしまうのではないかと考える」、「心情の理由」「異類の身となったから」、「心情の対象」「自分の姿に対して」と整理でき、解答にはこれらすべての要素が入っている必要があることを説明した。

ここで、小結を兼ねて、問一・二・三の解答を合わせ、小説序盤について、人間だったとき以来自尊心が高い李徴は、異類の身となった自分の姿を、卑しいものと自覚し、また、袁修に怖がり嫌がられてしまうのではないかと考えるにつけて、姿を現すことができなかつた、とまとめられることを説明した。その上で、小説終盤を

扱う問四・五へと移った。

「問四 はじめ袁修の前に「姿を現」さなかった李徴だが、結末ではどのような行動をとったか答えよ」は、問二・三の関係と同じく、問五へのつなぎとなる小問である。「叢から姿を現した」が解答となる。

「問五 なぜ、李徴は結末においては袁修の前に「姿を現」したのか、説明せよ」でも、問三同様、【誰】【どのような心情】【心情の理由】【心情の対象】を整理した上での解答を求めた。設問と次の本文から、

袁修が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけてよう。勇に誇ろうとしてはいい。

我が醜悪な姿を示して、もつて、再びここを過ぎて自分に会うとこの気持ちを君に起こさせないためであると。

【誰】「李徴」、【どのような心情】「再び自分に会う気を起こさせまいとする」、「心情の理由」「危険な目に遭わせたくないから」、「心情の対象」「袁修に対して」と整理でき、解答にはこれらすべての要素が入っている必要があることを説明した。

問四・五まで設問を解き進めてくると、姿を現すか否かにかかわって、小説序盤では自尊心を守るために姿を現さなかった李徴が、小説終盤では袁倬への思いから自尊心と決別して姿を現したという李徴の変化を読み取れることに、多くの学習者が理解を示した。この、小説序盤との対比から浮かび上がる、自尊心と決別して虎として姿を現すようになった小説終盤の李徴こそが、虎として生きていく覚悟を決めた、「決意」した李徴に他ならない。そして、李徴の変化の契機がどこにあったのかを考えるという流れで、問六・七へと移った。

「問六 はじめ、李徴は、虎になってしまった理由をどのように語ったか、答えよ」は「分からぬ」、「問七 その後、李徴は、虎になってしまった理由をどのように語ったか、答えよ」は「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」が解答となる。

問六・七に取り組むと、李徴が変化する過程において、自分が虎になってしまった理由についての語りに転換があることに気づく。

李徴は、自分が虎になってしまった理由を、初めはわからないとしたが、後に自尊心がその一因だと語った。自らの口で自尊心が自分の難だと語ったことが、李徴の変化の契機となったと読める。さらに、そのように読んだ場合、李徴が自尊心を虎になった一因として語るようになったきっかけについてはどのように考えられるかを補

足するために、次の通り説明した。

李徴が、自分が虎になってしまった理由を初めわからないとした後、自尊心がその一因だと語るようになるまでの間に描かれているのは、李徴の漢詩の朗詠である。ここで重要となるのは、第四・五・六句の一連の内容である。

当時 声跡 共相高 当時 声跡 共に相高し

我為異物蓬茅下 我は異物と為る 蓬茅の下

君已乘輶氣勢豪 君は已に輶に乗りて 氣勢豪なり

「お笑いぐさついで」の「即席の詩」に詠み込んでしまった、現在の自分と袁倬を比べての「自嘲」（第五・六句）。そして、その「自嘲」の反面に覗くのは、かつては自分も評判が高かったのだという自尊心である（第四句）。こうして、李徴は、漢詩に自尊心にかかわる内容を詠み込んだことを呼び水に、直後、自分が虎になってしまった一因には自尊心があると語るようになるのであった。

以上のようにして、小説序盤で自尊心を守るために姿を現さなかった李徴は、小説中盤、自分が虎になってしまった理由を初めわからないとしたが、漢詩の朗詠が分水嶺となって、その後自尊心が虎になってしまったことの一因だと語るようになり、小説終盤には自らの口で自尊心が自分の難だと語ったのを契機に自尊心と決別して虎として姿を現すようになった、という読解が組み上がる。学

習者は、稿者が設定した大学入試小説的な設問に対して、その解答を求め、右のような李徴の「決意」を前景化した読みの読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解していった。

#### 四、「葛藤」する李徴

方針Ⅱにかかわる授業内容を終えた後、続けて、方針Ⅰにかかわる設問に取り組んだ。それが問八〜問一四である。

「問八「しばらく返事がなかった」とあるが、このときの李徴の心情を説明せよ」は、問二・三とまったく同じ場面についての設問であり、一見、解答も同じでよいように見える。確かに、「返事がなかった」のは問二・三の解答の通りということになるが、問八で問うているのは「しばらく返事」をしなかった李徴の心情についてである。この「しばらく」という【細かなニュアンス】に留意しつつ、【誰】【どのような心情】【心情の理由】【心情の対象】を整理した上での解答を求めた。設問と次の本文から、

叢の中からは、しばらく返事がなかった。しのび泣きかと思われ、るかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。／袁徴は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声

が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、囚らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

実線部より【誰】「李徴」、【どのような心情】「卑しい姿だと自覚している」および「袁徴に怖がり嫌がられてしまうのではないかと考える」、【心情の理由】「異類の身となったから」、【心情の対象】「自分の姿に対して」、また波線部より【細かなニュアンス】その一方で「懐かしく、話を交わしたい」と整理でき、解答にはこれらすべての要素が入っている必要があることを説明した。

問一・二・三から、自尊心を守るために姿を現さないという行動を選んだと見えた李徴が、問八に取り組むと、実は心の中では「葛藤」していたと読み取れることに、多くの学習者が理解を示した。

問九〜問一三は、小説中盤でも、「人間の心がすっかり消えてしまえば」「しあわせ」だが「恐ろしいや、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」など、一貫して、李徴が自分の抱える「葛藤」を語っていることを読み取るための設問である。また、それらの「葛藤」の

両極にある心情が、具体的にどのようなものかを読み取るための設問である。紙幅の都合、詳細な解答は割愛する。

「問一四 「悲泣の声」とあるが、このときの李徴の心情を説明せよ」もまた、問八同様の趣旨の設問である。問四・五とまったく同じ場面についての設問であり、一見、解答も同じでよいように見える。確かに、「悲泣の声」で語った内容は問四・五の解答の通りということになるが、問一四で問うているのはその内容を「悲泣の声」で語った李徴の心情についてである。この「悲泣の声」という【細かなニュアンス】に留意しつつ、【誰】「どのような心情」【心情の理由】【心情の対象】を整理した上での解答を求めた。設問と次の本文、

そういう時、俺は、向こうの山の頂の巖に上り、空谷に向かつてほえる。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。俺は昨夕も、あそこで月に向かつてほえた。誰かにこの苦しみが分かつてもらえないかと。しかし、獣どもは俺の声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人俺の気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、俺の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかつたように。俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりで

〈実践報告〉 大学入試小説指導の詩学

はない。

および次の本文から、

袁傚が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上つたら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。

我が醜惡な姿を示して、もつて、再びここを過ぎて自分に会うとの気持ちに君に起こさせないためであると。／袁傚は叢に向かつて、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上つた。叢の中からは、また、堪ええざるがごとき悲泣の声が漏れた。袁傚も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出發した。

実線部より【誰】「李徴」、【どのような心情】「再び自分に会う気起こさせまいとする」、【心情の理由】「危険な目に遭わせたくないから」、【心情の対象】「袁傚に対して」、また波線部より【細かなニュアンス】その一方で「その悲しみを誰かにわかつてほしい」と整理でき、解答にはこれらすべての要素が入っている必要があることを説明した。

問一・二・三と問八の関係と同じく、問四・五から、自尊心と決別して姿を現すという行動を選んだと見えた李徴が、問一四に取り

組むと、実は心の中では「葛藤」していたと読み取れることに、多くの学習者が理解を示した。以上より、問八〜一四からは、小説全編を通して李徴が「葛藤」していたという読解が組み上がる。

このようにして、一度は、問一〜七への解答を進め、「決意」した李徴の物語の読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解した学習者は、今度は、問一〜七とは意図を変えて設定された問八〜問一四を解き、「葛藤」する李徴の物語という先とは異なる論理の読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解していった。大学入試小説の解法を習得するための設問を十分量・複数パターンこなした上で、学習者の目の前に、一つの小説に対して、二つの読解——いずれも設問の解答⇨本文に根拠を持った——が差し出されたことになる。これにより、方針Ⅲの通り、大学入試小説の解法を指導するなかで、正しい意味で、小説の多様な解釈の可能性を触知させられたものと考ええる。

#### 結びに代えて

「山月記」を例に、稿者が設定した大学入試小説的な設問に対して、学習者がその解答を求めることで、学習者の初読の感想をもとに稿者が仕掛けた読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解することを狙った授業実践について述べてきた。また、同

じ「山月記」で、稿者が意図を変えて設定した設問に対して、学習者が続けてこれも解くことで、先とは異なる論理の読解に出会うこと、すなわち、あくまでも大学入試小説の読解の指導を端緒として、小説の多様な解釈の可能性を触知させることを狙った授業実践について述べてきた。このような形で、大学入試小説の解法を活かし、「読解リテラシー」を育み、また、大学入試小説と小説を多様に解釈することの間を架け橋できるのではなからうか。

さて、最後に、忘れられない出来事の一つ紹介して、結びに代えることとしたい。

本報告に示した授業内容をすべて終えた後、定期考査を前に一人の生徒が私のところを訪ねてきた。その生徒は、授業内容について丁寧に質問・確認していくと、「読解について、二通り、それぞれ設問の意図がどう違うのかも含めて、理解できました。定期考査では、高得点をとれそうです」と言って、私を安堵させた。しかし、その生徒は続けて、次のようなこともまた、言ったのである。

でも、この二通りに読むことができるから、何なんですか？  
「山月記」が言いたいことというか、批評性というか、そういうところまで知りたいです。

私は、頼もしい思いがした。その生徒の言う通りであろう。私が示した読解のプロセスを、本文に即して論理的にたどり直し理解し

たことは、「読解リテラシー」を身に付けるための一つの段階に過ぎず、また、小説の多様な解釈を楽しむための初めの一步に過ぎない。授業なんて踏み台にして、「山月記」の本文にもっと幅広く目配せをして、別の論理での読解を、自分なりに自由に試みてくれればいい。テキストをめぐる環境に視野を広げて、「山月記」の批評性——同時代的な、あるいは現代における、そして生徒本人が生き抜かねばならない未来に対する——にまで、自分なりに自由に考えを及ぼしてくれればいい。

これが、「文学」が立ち上がった瞬間でなければ、「何なん」だというのか。大学入試小説の解法を活かし、小説の多様な解釈へとつなげることは、確かに成しうるようである。

#### 注

- ① 山田哲久「安部公房「棒」——リテラシーの向上を目指して——」〔同志社国文学〕七九、二〇一三年二月〕。
- ② 安松拓真「山月記 中島敦——次に虎になるのは誰か?」(石井正己編『国語教科書の定番教材を検討する!』三弥井書店、二〇二一年一月)。
- ③ 以下のA~Fについて、句読点を加える、明らかな誤字・脱字を正す、文意をわかりやすくするために中略を行うなど、便宜上、実際に提出された感想から、一部、文章を改めた。
- ④ 中野芳樹『現代文 読解の基礎講義』(駿台文庫、二〇二二年一〇月)。

〈実践報告〉大学入試小説指導の詩学

本報告第二章における、同書からの引用文に付した括弧内の頁数は、引用文の同書中での所在を示す。

\* 引用文に施した傍線・傍点などは、特に断りのない限り、すべて稿者による。

\* 本報告における「山月記」本文の引用は、『精選現代文B』(2 東書一現B322) (東京書籍、平成二九年二月一八日検定済) に拠った。

〔付記〕 本報告は、同志社大学教職課程が設ける教職に関する科目「教職実践演習(中・高)」での同題の講演(二〇二二年二月二六日)に基づき、加筆修正したものである。講演の機会を与えてくださった関係の皆様、当日貴重なご質問やご意見を賜りました学生の皆様にも、末筆ながら厚く御礼申し上げます。

また、本報告の授業実践を試みるにあたりご助言いただいた龍谷大学付属平安高等学校・中学校国語科の先生方、なによりこの授業を一生懸命に受けてくれた生徒のみんなに、この場をお借りして感謝申し上げます。